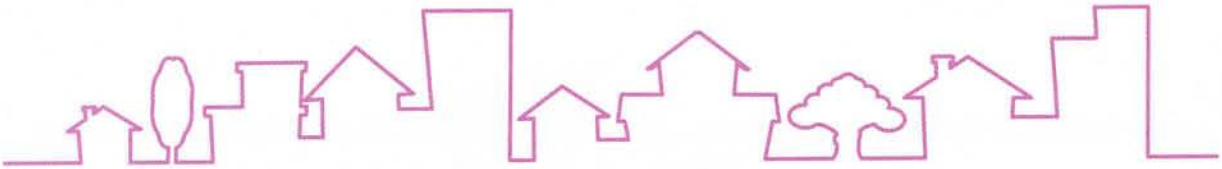

居場所づくりの可能性

久田　邦明（評論家）

記憶のなかの居場所

昔から子どもには、自分たちだけで過ごすところがあった。そして、そういうところで大人になるための準備をしていた。周囲の大人たちも、そんな子どもたちの活動の手助けをしていた。最近、居場所の必要が言われるのは、このような条件が失われてしまったからではないだろうか。

地域の伝統行事を思い起こしてみればよい。地蔵盆やどんど焼きの行事で、子どもは、おこもりをしたり、小屋を建てたりした。おこもりでは、自分たちで夕食の用意をして、年長者が年少者を励ましながらひと夜を過ごした。小屋づくりでは、柱に使う木材の調達から始めて小屋を建てた。また、家々を回って寄付を受け取り、帳面に付けて自分たちで管理して分配した。日常の遊びの“がき大将集団”も、このような行事の経験に学んだものだろう。

北関東のあるまちの公民館では、学校週五日制完全実施に対応した事業で、２年間にわたって小屋づくりを行ったという。公民館に隣接する雑木林に、子どもと大人が協力して小屋を建てた。この事業を発案した職員は、自分が子どもの頃のことを思い出したのだという。秋の稲刈りが終わって農作業が一段落すると、親が田んぼに稲わらの小屋を建ててくれた。その小屋で兄弟や友だちと過ごすひとときがとても楽しかった。その思い出をヒントにして、“基地づくり”の好きな子どもたちのためにこの事業を考えたそうだ。

その人の記憶に刻まれた稲わらの小屋は、昔の伝統行事の小屋づくりと、最近各地ですすむ居場所づくりのあいだに置くことのできるものではないか。

岩手県水沢市では、平成11(1999)年、ジュニアリーダーの中・高校生と大人が協力、旧消防署の建物を改装して、子どもの居場所ホワイトキャンバス*1をつくった。子どもと大人が一緒になって古い建物を改装して施設をつくるというのは珍しい事例のように思えるが、小屋づくりにはじまる居場所づくりの系譜を考えれば納得できる話である。

全国各地へ拡がっている冒険遊び場（プレーパーク）も、この系譜の上において理解することができる。じっさい、そこでは「自分の責任で自由に遊ぶ」という合言葉の下で、子どもたちは、穴を掘ったり、焚き火をしたり、水遊びをしたり、廃材を使って木の上に基地をつくったりしているのである。

ところで、地蔵盆やどんど焼きは、人生の予行演習の意味をもっていた。“家を建てる”“おかねの勘定をする”“ひとつのことを成し遂げるために皆で協力する”という三つの活動内容をみると、どれも大人になったときに必要な、もっとも基本的なことがらであり、子どもたちは、そこで大人になるための学習プログラムを経験していたことになる。見事な生活の知恵である。

ところが、このような伝統行事を支えた生活共同体の暮らしは高度経済成長の時期に急速に衰退していく。その後、地域で子どもを育てる役割を引き継いだのは、子ども会をはじめとする青少年団体や、児童館、青年館などの青少年施設だった。それに加えて、学校教育を視野に入れれば、これを引き継いだのが、もうひとつ、中学校の部活ではなかったかと、わたしは想像している。

中学校の部活は、先輩と後輩の上下関係、厳しい指導、明確な勝ち負けなど、近代学校の理念をモノサシにすると、説明の難しい要素を含んでいる。それにもかかわらず、多くの生徒が熱心に参加するし、教師も一生懸命に指導する。不思議な気がするが、これを地域の伝統行事の役割を引き継いだものとみれば納得がいく。

中学生はちょうど子どもから若者へと成長する時期である。彼らは部活で同世代との濃密な人間関係を経験して大人になる準備をしているのだろう。これに熱中する教師は、学校の先生というよりも、地域の青少年育成者の役割を担っているのではないか。

葛飾区では、平成14年度から教育委員会が予算を組んで、中学校の部活の顧問を住民に依頼する仕組みを始めた。部活が引き継いだ、地域が子どもを育てるという役割を思い返せば道理にかなった施策といえるだろう。

*1：子どもの居場所ホワイトキャンバス
〒023-8501　岩手県水沢市大手町1-1
水沢市教育委員会
水沢市青少年育成市民会議
Tel. 0197-24-2111（教育委員会代表）
http://homepage3.nifty.com/whitecanvas/